

## 「惑わされないように—終わりの徴が起こっていく中で」

ルカ 21:5-11

2020.10.4 南与力町教会朝拝

### 序：「世の終わり」についての説教

朝の礼拝ではルカによる福音書から御言葉に聞いています。イエス様が神殿で語られた教えが続いていますが、今日の所から新たな主題が始まります。それは「世の終わり」という主題です。今日の箇所から 22 章の終わりまでイエス様の「世の終わり、終末」についての説教が続いています。そうして神殿での教えの場面が終わるのです。

「世の終わり」に関する教えですので、この部分は小黙示録と呼ばれることもあります。ヨハネ黙示録には世の終わりに関することがさらに詳しく記されていますが、これはイエス様によって語られた小さな黙示録とも言えるものなのです。

「世の終わり」というと私たちは自分とはあまり関係がないような思いになるかもしれません。そういう意味では今日から始まる御言葉は私たちにとって理解が難しいものかもしれません。しかし、イエス様は私たちがそれについて知っておく必要があるので、「終末」について教えられたのです。

### ①神殿の見事な石も (21:5-6)

イエス様がその教えを語られるきっかけになったことが 21 章 5 節から語られています。

「ある人たちが、神殿が見事な石と奉納物で飾られていることを話していると、イエスは言われた。」

イエス様の時代にあった神殿は第二神殿と呼ばれるものです。第一の神殿は紀元前 1000 年頃、ソロモンによって建てられました。しかし、紀元前 587 年のバビロン捕囚の際にその神殿は破壊されてしまいました。捕囚から解放された後、エルサレムに帰って来た人々によって神殿が再建されましたが、それは以前のものよりも小規模なものでした。その後、紀元前 19 年頃からヘロデ大王がその神殿の大規模な増築工事を始めました。それによってイエス様の時代にはエルサレム神殿は大変立派で豪華なものになっていました。それゆえ今日の箇所である人たちはその「神殿が見事な石と奉納物で飾られていることを話してい」たのです。ヨセフスという歴史家が「ユダヤ古代史」や「ユダヤ戦記」という書物の中で神殿について記しています。神殿には白い大きな大理石が使われていました。ある石は長さ 26 メートル、高さ 2.5 メートル、幅が 3 メートルもあったようです（「ユダヤ戦記」5.5.6）。また「奉納物」については、ヘロデ大王が奉納した金のぶどうの木が、黄金の門の上に飾られていたことが記されています。そのぶどうの房は人間の背丈ほどの大きさでした。ここに出てくる人たちは、そういう神殿を見ながら、「あの石は立派で美しいなあ、あの金のぶどうの飾りもすばらしいなあ」と見とれていたのでしょう。

しかしイエス様はそういう人たちに対して次のように言われました。6 節

「あなたがたはこれらの物に見とれているが、一つの石も崩されずに他の石の上に残ることのない日が来る。」

そしてイエス様が言われた通り、紀元 70 年にはエルサレム神殿はローマ軍によって徹底的に破壊されてしまったのでした。イエス様はそのような日が来ることを予め預言なさったのです。

## ②終わりの徴 (21:7-11)

これを聞いた人たちはイエス様に尋ねました。

「先生、では、そのことはいつ起こるのですか。また、そのことが起こるときには、どんな徴があるのですか。」

ここで「そのこと」と訳されている言葉は「これらのこと」という複数形という言葉です。神殿が崩壊することだけを指しているならば、単数形でもよかったです。しかし彼らが「これらのこと」と複数形で語ったのは、神殿が崩壊するのは「終わりの時」だと考えていたからでしょう。終わりの時には神殿の崩壊だけではなく様々なことが起こる。そういったことはいったいいつ起こるのか、またそれらが起ころうとするときには、どんな徴があるのか、この二つのことを彼らは尋ねたのです。

イエス様はその最初の質問「それがいつか」ということには答えておられません。それゆえ「世の終わり」が具体的にいつ来るかということは私たちには示されていないのです。歴史の中では「世の終わりがいつ来るか」を当てようとする試みが何度もなされてきましたが、すべて外れてきました。それは私たちには教えられておらず、わからないのです。

しかしイエス様は「世の終わりが来る前にどんな徴、前兆があるか」ということについては教えられました。そのことが8節から11節までに教えられていますので、今朝はそこまでを見ていきたいと思えます。

まずイエス様が言われたことは8節です。

「イエスは言われた。「惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『わたしがそれだ』とか、『時が近づいた』とか言うが、ついて行ってはならない。」

終わりが来る前には、「わたしの名」、イエス・キリストの名を名乗る者が大勢現れる。すなわち偽メシアが大勢現れるということです。そして「わたしがメシアだ」とか、「終わりの時が近づいた」と言って、人々を惑わそうとするのです。私たちの時代でも、統一教会のような異端の教祖は、自らを再臨のキリストだと主張していました。イエス様はそういう偽メシアが現れるから、「あなたがたは惑わされないように、迷わされないように注意していなさい。そしてそういう人々の後について行ってはならない」と注意を促しておられるのです。

さらに9節でこう言われます。

「戦争とか暴動のことを聞いても、おびえてはならない。こういうことがまず起こるに決まっているが、世の終わりはすぐには来ないからである。」

戦争や暴動（反乱）のことを耳にしても、おびえてはならない、恐れおののいてはならない。これがイエス様が二番目に語られたことです。しかし普通「戦争や暴動のこと」を聞くと、恐ろしく感じるのではないかと思います。なぜこわがってはいけない、と言われるのでしょうか。その理由としてイエス様は「こういうことがまず起こるに決まっているが、世の終わりはすぐには来ないからである」とおっしゃっています。戦争や暴動はまず起こる、最初に起こるように決まっている。それは神様のご計画の中でそう定まっているということです。しかし、それらが起こったとしても「世の終わりはすぐには来ない」と言われています。だから、戦争や暴動のことを聞いても、おびえてはならない、恐れる必要はない、と言われるのです。

実際、紀元66年にはユダヤ人たちがローマ帝国の支配に不満をもって反乱を起こしました。そうしてユダヤ戦争が始まり、紀元70年にはエルサレム神殿が破壊されることになったのです。しかしそれ

が起こった後も、すぐに世の終わりは来なかった。イエス様の言われた通りになったのです。

そして10節からはさらに終わりの徴が列挙されていきます。

「そして更に、言われた。「民は民に、国は国に敵対して立ち上がる。」

「民」とは異邦人、諸国民を表わす言葉です。異邦の民が民に対して立ち上がり、国が国に対して立ち上がる。ユダヤだけではなく、世界各国でそのような対立、争い、戦争が起こる、ということです。

実際、そのような戦争は歴史の中で繰り返し起こってきました。

そして11節

「そして、大きな地震があり、方々に飢饉や疫病が起こり、恐ろしい現象や著しい徴が天に現れる。」

大きな地震は日本でも世界でも繰り返し起こっています。飢饉や疫病もそうでしょう。「疫病」については私たちは今まさに今コロナウイルスという疫病、伝染病の只中にあります。このように見ていくとイエス様がここで挙げておられる「終わりの徴」とは、すでに歴史の中で起こってきたことであり、今も起こっていることであることがわかります。

しかし最後に挙げられている「恐ろしい現象や著しい徴が天に現れる」ということについてはどうでしょうか。天からの徴ということに関しても、天に不思議な現象が現れることはこれまでもあったのだと思います。しかし「天からの著しい徴、大きな徴」ということになればどうでしょうか。この徴は具体的には次のページのルカによる福音書21章25節から26節に記されているものと思われます。お読みいたします。

「それから、太陽と月と星に徴が現れる。地上では海がどよめき荒れ狂うので、諸国の民は、なすすべを知らず、不安に陥る。人々は、この世界に何が起こるのかとおびえ、恐ろしさのあまり気を失うだろう。天体が揺り動かされるからである。」

このような恐ろしい現象、天からの大きな徴はまだ起こっていないのだと思います。そしてこういう徴が起こった時に、27節にあるように「そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る」。人の子であるイエス・キリストが再臨されるのです。

その意味でも「天からの大きな徴」は世の終わりが来る前に起こる最後の徴であり、それはまだ起こっていないのです。イエス様が今日の箇所では挙げられている「終わりの徴」のほとんどのものはすでに起こっていますが、最後の天からの徴はまだ起こっていない。私たちはそのような状況の中を生活しているのです。

その中で先ほども申し上げましたように、今私たちが経験しているコロナウイルスという疫病も流行しています。コロナウイルス自体は人類にとって経験したことのない未知のもので、しかし、「戦争や暴動がまず起こるにきまっていた」ように、このコロナウイルスによる疫病も神様のご計画の中で起こると決まっていたものであることを覚えたいと思います。決して、神様のご計画の外側で偶然起こった出来事ではない、ということです。イエス様が世の終わりの徴として起こると言われていたことの中に含まれていたことなのです。それゆえ私たちはそれを過度に恐れる必要はないはずです。もちろん感染を広げないための対策と配慮は必要ですが、この病が神様の御手の外で起こっていることのように考える必要はない。すべては神様の御手の中、ご計画の中にあることなのです。そのことを信じるならば、私たちはこれを過度に恐れることなく、神様の御手にすべてを委ねることができるはずです。

しかしそれにしても神様はなぜこのようなことを起こされるのでしょうか。あるいは起こるのを許しておられるのでしょうか。コロナウイルスのことだけではありません。戦争も地震や飢饉や疫病もすべて災いであり、私たちにとっては起こってほしくないものばかりです。なぜそれらのことが起こるのでしょうか。そのような災害が起こるとき、それが神の裁きであると語られることがあります。確かに旧約聖書においては、戦争や地震や飢饉や疫病というものが神様からの裁きとして出てきます。しかし注意したいことは今日のところでイエス様ご自身はこれから起こる災いが神様からの裁きだとはおっしゃっていない、ということです。明確に神の裁きとして語られているのは、この後出てきますエルサレムの滅亡のことだけです(ルカ 21:23)。それゆえ私たちはそれらすべてが神の裁きであると言うことには慎重でなければならないのだと思います。特にそれによって命を落とした方が、特別に神の裁きに遭ったという考えはすべきではありません。そのような考えはイエス様ご自身が否定しておられることです(ルカ 13:1-5)。

しかしそのようなことを踏まえた上で、なぜこのようなことが起こるのでしょうか。まずわきまえるべきことは、私たちは神様の御心のすべてを知ることはできない、ということです。起こる出来事の一つ一つにどのような神様の御心が込められているのか、そのすべてを知ることはできないのです。しかし今日の箇所ですら少なくとも私たちが心に留めるべきことは、それらをイエス様は「終末の徴、前兆」として語っておられるということです。もちろんそれらが起こったからといってすぐに世の終わりが来るわけではありません。では「徴」には何の意味があるのでしょうか。それは世の終わりが確かに来ること、近づいていることを私たちが悟るためのものです(ルカ 21:31)。もしそのような徴がなければどうでしょうか。今日の箇所である人たちが立派な神殿に見とれていたように、私たちも目に映るもの、今あるものがこれからもずっと続いていく、そのままあり続けるとしてしまうのではないかと思います。私たちがコロナウイルスによって経験したのもまさにそのことだったと思います。これまで当たり前と思っていたことが当たり前ではなくなる、という経験です。世の終わりの時に、滅びるのは神殿だけではありません。ルカ 21 章 33 節でイエス様は次のようにおっしゃっています。

「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」

ここで「滅びる」と訳されています言葉は、「過ぎ去る」と訳すこともできます。世の終わりには天地が滅びる、過ぎ去っていくのです。「終わりの徴」はそのことを私たちが思い起こすためのものです。しかし決して滅びないもの、過ぎ去らないものがあります。それはイエス様が言われるように「わたしの言葉」、すなわち「イエス様の言葉、神の言葉」です。

私たちは不安や恐怖をあおるような声に惑わされず、また様々な災いも過度に恐れることなく、決して滅びることのないイエス様の言葉、神の言葉に聞き続け、そこに堅く立ち続けていく必要があるのです。

私たちの教会も建物としてはいつか滅びていく、朽ちていくものです。しかし私たちが教会で耳を傾けているイエス様の言葉は決して滅びることないものです。そしてそのイエス様の言葉に従えば、私たちにとって世の終わりとはただすべてが滅びる恐ろしい日ではなく、私たちが完全に救われる日、そして神の国が完成する日です(ルカ 21:28, 31)。そこに私たちの希望があります。最後に第二コリント 4 章 18 節をお読みいたします。

「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。」